

早世の音楽家 貴志康一

—— 生誕100年に寄せて ——

堀内 泰紀

忘れられた早世の音楽家貴志康一（1909～1937）。2年前の没後70年、そして今年の生誕100年に当たって新たな光が当てられたとは言え、その名はいまだに広く知れ渡っているとは言い難い。そこで貴志の名の甦りを願って、彗星の如く駆け抜けて逝ったその生涯を辿ることにする。

現在の和歌山県紀ノ川市貴志川町が、貴志康一の父祖である紀州藩士貴志家が居を構えた地である。明治4年（1871）の廃藩置県は、維新政府が断行した数多くの改革のなかでも、とりわけかつての支配者階級であった武士の特権を奪う革命的大手術であった。それを契機として、旧紀州藩士貴志亀之進の次男で康一の祖父になる貴志彌右衛門は大阪に進出、心齋橋筋で洋反物商人として成功し一代で財を成した。

康一は1909年3月31日、彌右衛門の長男である奈良二郎を父に、カメを母として貴志家の長男として誕生、9歳まで現在の大阪市都島区網島町で育った。父は祖父が創業した繊維問屋を手広く営むことになるが、東京帝大哲学科で美学を専攻し、芸術・文化への理解の深い趣味豊かな知識人、母は代々皇室に献上米を納めてきた吹田の豪農・庄屋の旧家西尾家の二女であった。その邸宅は、母屋、離れのほか茶室や露地までも備えており、現在は文化遺産として「吹田文化創造交流館」となっている。つまり、康一は「財力と知力」を兼ね備えた家に生を享けたのである。それは彼の生まれるちょうど100年前、啓蒙主義時代の著名な哲学者であるモーゼスを祖父に、富裕な銀行家アブラハムを父として商都ハンブルクに生まれ、今年生誕200年を迎えたフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809～1847）を思わせる。貴志康一の風貌は、日本人離れした育ちの良い優男風であるし、その作品からも、メンデ

ルスゾーン張りの伸びやかでみずみずしい叙情性が聴き取れる。

康一の芸術的才能の基盤は、子供たちの健康のために一家が1918年に転居した現在の芦屋市伊勢町で築かれた。子供の個性を尊重し、伸ばしていこうという自由闊達な校風の甲南小学校5年生に編入し、当初画家志望であった康一が6年生の時に描いた油絵が貴志康一記念室に掛けられている。それはど



太田喜二郎作「子供の家」表札（学校法人甲南学園貴志康一記念室所蔵）

ても子供の手に成るとは思えないタッチで描かれており、みずみずしい躍動感が画面から溢れる見事な仕上がりである。またその頃から、母の音楽の旧師大橋純二郎にヴァイオリンのレッスンも受け始めている。1920年には、日本家屋の本宅に加え子供（当時貴志家は一男六女）の情操教育のために洋館が増築された。音楽室、アトリエ、演芸室、裁縫室も備わったその館には、父の友人でもある康一の絵の先生、太田喜二郎作「子供の家」（La Maison des Enfants）という洒落た表札がかけられていた。その音楽室で当時世界最高級のドイツのイーバツハ社製アップライト・ピアノを弾く妹をモデルに描かれた、15歳の康一作の絵も記念室に収蔵されている。パリのオルセー美術館に所蔵されているオーギュスト・ルノワール（1841～1919）の名作「ピアノの前の少女たち」（1892）は、高価な家庭用ピアノを子女に弾かせる光景と奥に飾られた絵や調度品を描いて、近代ブルジョワ家庭の豊かな生活ぶりを示しているが、康一の絵はまさにその日本版とも言えるであろう。¹⁾

明治後期から昭和初期までにかけて阪神間モダニズムと呼ばれた時代、1905年に開業していた阪神とともに、1920年に阪急電車が阪神間に開通して以来、そこは富裕層の別荘地であった。後に深江文化村と称されるようになって

た芦屋川西岸に建設された洋館街には、9カ国13組もの家族が居住していた。そこにロシア革命を逃れてきた音楽家が移り住んだことで、すでに周辺に住んでいた欧米出身の音楽家とともに、康一少年の周りには居ながらにして国際的な音楽サロンができていたのである。

甲南中学校での視力検査で色覚異常を宣告されたこともあって音楽に身を入れ始めた康一は、理想的な環境のもと、ロシア楽派の父レオポルド・アウアー（1845～1930）門下のミハイル・ヴェクスラー（1896～??）にヴァイオリンを、オーストリア出身の作曲家・指揮者のヨーゼフ・ラスカ（1886～1964）に音楽理論を学んだ。そして甲南高校に進学した16歳の頃には、プロの音楽家になる決意を固めたようである。代表作のひとつ「ヴァイオリン協奏曲 イ短調」（1931～1935）などにロシア的な情趣が顔を覗かせるのは、少年時代の音楽環境に因るのだろう。



スイス留学中

1926年12月甲南高校を2年で中退、留学のため単身渡欧した17歳の貴志は、翌27年早々スイス国立ジュネーヴ音楽院（1835年設立）に入学し、ヴァイオリニストとしての道を歩み始める。この確信に満ちた決断と素早い行動は、彼の天性がさせたものであろう。留学後のヨーロッパでも生来の伸びやかさが遺憾なく発揮されることになるが、資料調査のため貴志康一記念室を訪ねた筆者は、保管されている約600通の書簡類のなかから一葉の絵葉書を見つけた（以下原文引用）。

「パラダイスの様なパイロイテ。 いよいよ今日からここでオペラを聞きます。獨いつの旅はなかなか面白いです。不なれなので失敗もよくやります、が後での思ひ出ばなしです。こちらは暑くありません。朝なんか寒い位です。日本よりははるかにしのぎ安いです。天気もほほよいので大変結構です。食もの

は一人ですからいかな僕もおく病にならざるを得ません。ミュンヘンでは日本料理もひさしぶりでたべましたし日本語もしゃべりました。日本語はまだ忘れません。パイロイテ 康一」

1927年7月22日の消印が押されたこのパイロイト祝祭劇場の絵葉書は、シベリア鉄道経由の便で故国の母カメに宛てられたものである。ジュネーヴ音楽院ヴァイオリン科中等クラスに入学、わずか半年も経たない6月の試験でブルミエ・プリ（一等賞）を受賞した18歳の貴志は、夏期休暇中にヨーロッパ



パイロイトにて

に来て初めての一人旅でパイロイト祝祭（Bayreuther Festspiele）に出かけていたのである。ひと気のない祝祭劇場を背景にニッカーボッカー姿で撮影された写真が遺されているが、それはこの絵葉書とともに、彼の晴れやかな幸福感を伝えていている。

1876年に始まったパイロイト祝祭は、今でこそ毎夏開催されているが、当初は資金不足もあって度重なる中断を挟みつつ開催されており、とりわけ第一次大戦勃発の翌1915年からは長い中断を余儀なくされていた。ようやく1924年に再開されたものの、それに備えて貯えられていた寄付などによる基金は平時なら祝祭の運営に充分であったが、戦後のインフレ激化のために価値が激減してしまっていた。そのため翌25年は開催できたが、26年は再度休止という状況であった。当時は創始者リヒャルト・ヴァーグナー（1813～1883）の一人息子ジークフリート（1869～1930）が、母コージマ（1837～1930）の後継総監督として祝祭を運営していたが、このような状況の下、彼は祝祭を運営するには切符の売りさばきに頼らざるを得ないと判断したようである。²⁾

貴志が留学後初めての夏にパイロイト祝祭を訪ねることができたのは、そう

早世の音楽家 貴志康一 (堀内)

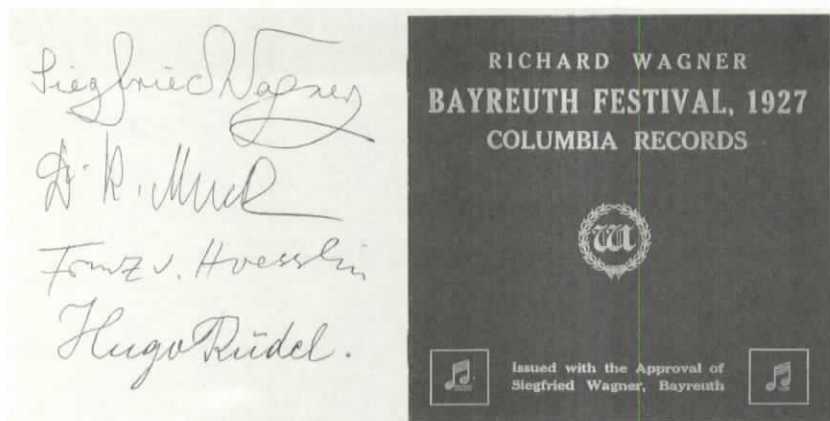
Richard Wagner Museum

Bayreuther Festspiele

Werk	Das Rheingold
Aufführungsjahr	1927
Aufführungstage	01.08.1927; 13.08.1927; 1927; 1927; 22.07.1927
Neuinszenierung	nein
Mitwirkende	<p>Siegfried Wagner, Festspielleitung, (Bayreuth 1869 - 1930 Bayreuth) Siegfried Wagner, Regie/Inszenierung, (Bayreuth 1869 - 1930 Bayreuth) Franz von Hoëßlin, Dirigent(in), (München 1885 - 1946 Südfrenz Küste/Span. Grenze) Max Brückner, Bühnenbild, (Coburg 1836 - 1919 Coburg) Friedrich jun. Kranich, Bühnenbild, (Darmstadt *1880) Daniela Thode, Kostümgestaltung Josef Corneck, Wotan, alternierende Besetzung, (Düsseldorf 1892 - 1948 Hannover) Friedrich Schorr, Wotan, Sänger(in), (Nagyvarad 1888 - 1953 Farmington (Conn.)) Richard Lüttjohann, Donner, Sänger(in) Kaspar Koch, Froh, Sänger(in), (1889 in Köln) Fritz Wolff, Loge, Sänger(in), (München 1894 - 1957 München) Eduard Habich, Alberich, Sänger(in), (Kassel 1880 - 1960 Berlin) Walter Etschner, Mime, Sänger(in), (Danzig 1887 - 1929 a. d. Fahrt n. d. USA i. New York) Karl Braun, Fasolt, Sänger(in), (Meisenheim a. Gian (Rhpr.) 1885 - 1960 Hamburg) Walter Eckard, Falner, Sänger(in), (Berlin) Maria Eugenia Ranzow, Fricka, Sänger(in) Hilde Sinnek, Freia, Sänger(in), (geb. 1900) Eva Liebenberg, Erda, Sänger(in), (Stettin *1890 verstarb 1971 in Hilversum) Maria Nežadal, Woglinde, Sänger(in), (Pardubice (Tschechoslowakei) *1897) Minny Ruske-Leopold, Wellgunde, Sänger(in), (geb. 1887) Charlotte Müller, Flöshilde, Sänger(in) Wolfram Humpferdick, Regieassistent, (Frankfurt/M.) Alexander Spring, Regieassistent, (Stuttgart 1891 - 1956 Stuttgart) Maximilian Albrecht, Musikalische Assistentz Franz Allers, Musikalische Assistentz Lucian Balms, Musikalische Assistentz Johannes, Dr. Brockt, Musikalische Assistentz F. Lindner, Musikalische Assistentz Paul Cornelius, Musikalische Assistentz Karl II. Köhler, Musikalische Assistentz, (1904 in Diedenhofen) Werner Müller, Musikalische Assistentz Martin Egelkraut, Solorepetitor(in) Evelyn Falts, Solorepetitor(in), (1887 in Wien +1937 Wien) Albert Fischer, Solorepetitor(in) Carl Gianicelli, Solorepetitor(in), (1860 in Nied. Österreich 1939 in Bayreuth) Hans-Philipp Hofmann, Solorepetitor(in) Karl I. Köhler, Solorepetitor(in) Richard Kraus, Solorepetitor(in), (1902) Emil Reiser, Solorepetitor(in), (Konstantinopel *1885) Erich Riede, Solorepetitor(in), (1903 in London) Ernst Schmidt, Solorepetitor(in), (München 1876 - 1955 Bayreuth) Hugo Rüdel, Chorleitung, (Havelberg (Mark) 1868 - 1934 Berlin) Friedrich jun. Kranich, Technische Leitung, (Darmstadt *1880) Karl Kittel, Sonstige, (Wien 1874 - 1945 Schwerin (Mecklenburg)) Luise Reuß-Belce, Sonstige, (Wien 1863 - 1945) Rudolf-Tristan Kranich, Sonstige, (Darmstadt *1886 April 1945 in Bad Gandersheim) Armin Lenz, Sonstige Kurt Söhnlein, Sonstige, (Wiesbaden *1894) Rudolf Scheel, Sonstige Friedrich jun. Kranich, Technische Leitung, (Darmstadt *1880)</p>
Bemerkungen	<p>Oberleitung d. musik. Vorbereitung: Carl KittelDram. Ass.: Luise Reuß-BelceTechn. Ass.: R. Kranich, A. Lenz, K. SöhnleinMusik.-Ass.: R. Scheel</p>

1927年パイロイト祝祭『ラインの黄金』上演データ (提供:リヒャルト・ヴァーグナー博物館)

した絶好のタイミングであった。絵葉書の消印に拠ると、彼が先ず聴いたのは『ラインの黄金』(フランツ・フォン・ヘスリー指揮)である(1927年7月22日上演)。『ニーベルングの指環』の切符は4演目通しのセットで販売されるのが通例となっているので、彼はおそらく全四部作を聴いたのであろうが、その年に上演された他の演目『パルジファル』と久々の新演出の『トリスタンとイゾルデ』を聴いたかどうかは定かでない。資金調達のためもあったのであ



1927年パイロイト祝祭 ライヴ録音 SP 盤ジャケット表紙と指揮者のサイン（筆者蔵）

ろうか、この年8月の祝祭劇場初のライヴ録音で、SP時代に大反響を呼んだ「神秘の奈落」³⁾の音が遺されている。『ラインの黄金』、『ヴァルキューレ』、『ジークフリート』、そして『パルジファル』からの抜粋が録音されているが、幸いにして我々も現在その復刻CDで貴志が聴いた演奏を聴けるようになったのである。⁴⁾

1928年9月貴志はかねてからの念願であったベルリンに移り、当地の音楽大学で名教師カール・フレッシュ（1873～1944）に師事する。ベルリンで購入した、当時の時価で6万円（大学出のサラリーマンの初任給が60円前後という時代）ものストラディヴァリウス「キング・ジョージ三世」⁵⁾を携えて、約1年後にシベリア鉄道を使って一時帰国した20歳の貴志を、各紙が「6万円といふ名器抱いて、若き貴志君帰る」と書き立てている。それにしても、弱冠20歳の息子の破天荒な決断を、逡巡しながらも遂には承諾した父彌右衛門（1923年に初代彌右衛門が病没、家業の繊維問屋を継ぐに当たって貴志の父奈良二郎が二代目を襲名）の度量の広さには、驚きを禁じ得ない。

帰国後1年も経たない翌30年5月に貴志は再び渡独、再度ベルリン音楽大学でヴァイオリンを学ぶが、同時にパウル・ヒンデミット（1895～1963）に作曲を師事している。⁶⁾ヴァイオリニストとして日本で脚光を浴びるのは、



ヒンデミットと共に

～1987) など、ヴァイオリン界の俊英が縦横無尽に活躍していた。さしもの貴志もヴァイオリンでは太刀打ちできないと感じたのであろう。⁷⁾ 31年7月には再帰国するが、その頃からは作曲に本格的に取り組み、さらに日本文化の紹介活動も志している。⁸⁾ ここでも、貴志の柔軟さと素早い行動力が遺憾なく発揮されているのである。貴志作品の随所に、日本人作曲家には珍しい音域の



フルトヴェングラーの自宅にて（左から康一、フルトヴェングラー、音楽ジャーナリスト加藤鋭五）

洋行帰りのエリート貴志康一にとってはさほど困難なことではなかったかもしれない。しかし世界に目をやれば、1929年4月にその演奏を聴いて衝撃を受けた7歳年少の神童ユーディ・メニューイン（1916～1999）や8歳年長のヤツシャ・ハイフェッツ（1901

跳躍や鮮やかな転調が散りばめられているが、それも天性のなせる業と言えるであろう。

貴志にとっては最後となる翌32年11月からの三度目のベルリン滞在中、彼は作曲に加え指揮活動と日本紹介の文化映画制作などにも身を入れ始めている。⁹⁾ 指揮者・作曲家のヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886～1954）との交友も始まり、数年後わずか25歳の若さでベルリン・フィルを客演指揮する機会も与えられた。¹⁰⁾ 彼は第一次ベルリン滞在（1928～29）から、旧西ベルリンの中心クー



貴志康一指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
1934年11月18日演奏会プログラムより（提供：学校法人甲南学園貴志康一記念室）



ベルリンフィルを指揮

アフルステンダムに近いシャルロテンブルク区を生活の中心にしている。彼が最も長く暮らしていたモムゼン街には、幸い第二次大戦の破壊を免れた20世紀初頭からの堅牢な住宅も残り、往時の重厚な雰囲気が漂っている。その角地には彼が作曲を師事したヒンデミットの



貴志康一ゆかりの地ベルリンのモムゼン街ヒンデミット広場にある聖ゲオルク噴水（筆者撮影）

名を冠した広場もあり、ベルリンでの貴志を今身近に感じられる格好の地となっている。

ベルリン日独センターを会場として、2009年3月10日から4月17日まで、甲南大学とベルリン日独センターの共催で“Koichi KISHI—Ein junger japanischer Musiker in Berlin (1928-1935)”と題した生誕100年記



写真展の開催されたベルリン日独センター(筆者撮影)



KONAN UNIVERSITY

JAPANISCH-DEUTSCHES ZENTRUM BERLIN (JZB)
Saarländer Str. 2, 14195 Berlin (U3 Ostkreuz-Höllener Platz)
Tel: 030/939 07 0 Fax: 030/939 07 220 www.jdz.de
Montag - Donnerstag: 10.00 - 17.30 Uhr
Freitag: 10.00 - 15.30 Uhr

Köichi KISHI

Ein junger japanischer Musiker in Berlin (1928-35)

10.03 - 17.04.2009

Eröffnung der Ausstellung am Dienstag, den 10.03.2009, um 19 Uhr

Eintritt frei



Foto: Köichi Kishi-Gedenkstätte (Konan University, Köln)

Anlässlich des 100. Geburtstags von Köichi KISHI in diesem Jahr findet eine Ausstellung statt.

Köichi KISHI (1909-37) studierte als Violinist am Konservatorium Genf sowie an der Musikhochschule in Berlin. Zugleich lernte er bei Paul Hindemith Komposition sowie bei Wilhelm Furtwängler Dirigieren. Während seines Berlinaufenthaltes war er u.a. als Komponist und Dirigent tätig, so dirigierte er 1934 auch die Berliner Philharmoniker. Er ist damit einer der vielen Japaner, dessen Leben eng mit Berlin verknüpft ist.

Die Konan Hochschule (heutzutage Konan Universität) in Kōbe, die KISHI besuchte, stellt hierfür Fotos, Zeitschriftenbeiträge, sowie Andenken an den jungen Musiker, wie z.B. Musiknoten zur Verfügung, die aus dem Besitz der Köichi KISHI-Gedenkstätte der Universität stammen.

Zur Ausstellungseröffnung werden Kompositionen von Köichi KISHI zur Aufführung gebracht. Ein kurzer Vortrag über sein Wirken in Berlin steht ebenso auf dem Programm, wie die Aufführung eines Kurzfilms über japanische Kultur; Teil dieser Filme, mit deren Inszenierung und Musik sich KISHI befasste: „Haru“ (Der Frühling) und „Kagami“ (Der Spiegel). Zu dieser Veranstaltung möchten wir Sie hiermit ganz herzlich einladen.

Veranstalter: Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Konan University (Kōbe)

Unterstützung: Botschaft von Japan

Mitwirkung: Berliner Philharmoniker, All Nippon Airways Co., Ltd.

Auch dem Lunchkonzert in der Berliner Philharmonie am 10. März (13.00 - 13.30 Uhr) gelangen Werke von KISHI zur Aufführung. (Einleitung und Gesang: Soprano: Frau Akiko Nakajima, Pianist: Herr Koichi Akao, Violon: Herr Daniel Bell, Berliner Philharmoniker)

ベルリンでの展覧会チラシ

念の写真展が開催され、彼のベルリンでの活動の軌跡、そして日独交流への熱い思いが紹介された。

1935年5月に帰国すると、貴志は日本で文字通り獅子奮迅の活動を始める。しかし、翌36年6月には盲腸炎をこじら

せた腹膜炎で病床に就いて

しまう。そして三度の手術

を繰り返すが、家族思いの

彼にとっては、自らの病に

追い打ちをかけるかのよう

に同年晩秋と初冬に若い妹

と父を相次いで喪ったこと

が、何より大きな衝撃とな

ったのであろう。芦屋の

自宅で療養生活に入り一時

は快方に向かったものの、

見果てぬ夢を叶えることな

く、1937年11月17日

貴志康一は心臓麻痺で急

逝。28歳の若さであった。

そして、その後のきな臭い

日本で、彼の名と存在は忘

却の彼方に去ってしまった

のである。

貴志家の菩提寺は、臨

濟宗妙心寺派の大本山で



妙心寺徳雲院墓所にある貴志家の墓（筆者撮影）

ある京都花園の古刹妙心寺内に、篤信の初代彌右衛門が1918～22年にかけて修復・再興した塔頭徳雲院である。1919年7月には、貴志家の立派な墓碑が院内の墓所に建立されている。¹¹⁾

貴志康一がナポリから神戸に向かう帰国の諏訪丸船上で綴った長文の一部を紹介し、本稿の結びとする。

「このたび渡欧して以来、僕の気持ちにかなりの変動があった。自然音楽に対する考えも変わらずにいらなかった。十七歳のときから主に欧州にて教育を受けた僕には、西洋音楽の美しさ、深さ、大きさが骨髓にまでしみ込んでいる、と同時に、西洋音楽を楽しめば楽しむほど、日本人として何かしら日本より次第に遠ざかって行くやうな淋しい気持ちが湧き日本が恋しくなり、日本芸術に憧憬を抱くやうになって来た。近来好んで和楽に親しみ、日本音楽の専門家諸氏と交際するやうになったのも、一に彼らにより僕の「渴」を治してもらふためであった。僕は提琴家だし、今でも弾いている。提琴によって欧州大天才の芸術に接するとき、そこにはいひ知れぬ楽しみがあったが、またその一面に何となく寂寥を感じざるを得なくなって来た。凡てが借り物だ。借り物をまた人に借り物として紹介して喜んでいるのだ。どうして自分自身のものを生み出せないのか、仮令それが未熟な不完全なものであらうとも — かういふ不満から僕は作曲に入らざるを得なかった。そして意識的にか無意識的にか、それには何か我々の人種の血が通っている東洋の香が曲の内にしみ入らざるを得なかった。それを私はどんなに喜んだことだらう。広大な他人の邸宅に寄住させてもらふより寧ろ小さいながら自分の家に住んだ方がどれだけ落着くか知れない。」¹²⁾

【付記】

1. 貴志康一関連の写真は、特記したものの以外いずれも「学校法人甲南学園 貴志康一記念室所蔵資料」である。なお、本稿は“Brunnen”2009年6月号（郁文堂発行）所収の拙稿『大器免成』に大幅に加筆したものである。執筆に際して、同記念室の内野順子さんに資料・情報等の提供でご協力をいただいた。ここに謝してお礼申し上げる。

2. 1927年バイロイト祝祭のデータ提供については、バイロイト友の会事務局長イーナ・ベッサー-アイヒラー女史、並びに国立ヴァーグナー文書館のフェッティンガー博士に便宜を図っていただいた。ここに謝してお礼申し上げる。

注

1) 画才に恵まれたメンデルスゾーンも、素人離れした見事な出来栄えの風景画など多くの作品を遺している。貴志康一は自伝風短編小説『恋』（未発表）を1931～32年にかけて書いており、その（三）初恋には以下の描写がなされている。

「丁度茂（筆者注：主人公の名）が十二の夏、家族は大阪と神戸との中間にある芦屋と云ふ所に居を移した。勿論これまでも夏休みには両親と共に毎年芦屋に海水浴に来ていたが、茂達六人兄妹には芦屋が非常に好きな所だったのと、大阪市中はどうも空気が悪いし騒々しいし其の上通学にも危険なので、両親も一つには当時流行の郊外生活の大勢に圧され海岸に「子供の為の家」を建てた。（中略）子供の室は各々趣味希望に依り、茂には絵画室、或る妹には音楽室、演芸室等、又洋館の好きな者には洋館、母など坐らないと落ち着かないと云ふ者等には日本館、兎に角家全体が子供本位で生活も子供本位の生活だった。（中略）此の楽しい明るい家庭の茂は実に幸福であった。その雰囲気之感化、それにより力を得て澁刺と伸びつつあった彼の心身は実にすばらしいものだった。」

2) 1876年に始まったバイロイト祝祭（Bayreuther Festspiele）は、一般にはバイロイト音楽祭として知られ、ヴァーグナーの歌劇・楽劇のうち『さまよえるオランダ人』以降の作品のうち5～7作品が選ばれて上演される、世界で最も著名な音楽祭のひとつである。7月末から約1ヶ月余り、ドイツ連邦共和国バイエルン州の北東

部に位置する、フランケン地方の旧辺境伯領の中心地パイロイト市で開催されるが、毎年開催されるようになったのは、第二次大戦後の財政上の問題が解決された後の1951年からである。ただし、ヒトラーがヴァーグナーの熱狂的な愛好家であったため、多大な補助金で経済的基盤も保証され、1936年から44年まではナチ政権下のドイツの重要な文化政策として、祝祭は敗戦の年の夏を除いて第二次大戦中も国威発揚と軍事慰労を兼ね毎夏開催されていた。この間の演目は『ニーベルングの指環』と『さまよえるオランダ人』に集中し、半世紀以上も上演されてきた『パルジファル』は演目から初めて外された。1943年と44年にはドイツの芸術を称える終結部を持つ『ニュルンベルクのマイスタージンガー』のみが演目に残った。世界のヴァーグナー愛好家にとって、まさに「聖地」パイロイトで開催されるこの祝祭を訪れることは、今なお宗教的な巡礼に喩えられるほどである。

- 3) パイロイト祝祭の会場となる1876年に完成した木造の祝祭劇場(Festspielhaus)は、ヴァーグナー自身の設計で、通常の歌劇場とは異なった構造で建設されており、オーケストラピットが観客席からは見えない舞台の下にある。そのため、そこは「神秘的な奈落」と呼ばれている。奈落から観客席に届くオーケストラの響きは、独特な楽器配置も相俟って歌手の声を掻き消すことなく絶妙なバランスが保たれており、他の歌劇場では決して体験できないものである。そのバランスを保つ響きをオーケストラから引き出すために、指揮者には並外れた能力が要求されることになる。
- 4) "Bayreuth Festival, 1927" Preiser Records 1999.
- 5) 貴志はベルリンに向かう途上パリにも立ち寄り、演奏会用のヴァイオリンを求め様々な楽器を試奏し、故国の父宛に報告している。1929年8月にベルリンで購入したこの楽器は1710年製で、19世紀初頭には英国王ジョージ三世が所有していたため、その名で呼ばれている。現在の円価では、およそ2億円程度と考えられる。
- 6) 貴志が二度目のベルリン留学時代に師事した彼の兄弟子でもあるヨーゼフ・ヴォルフスタール(1899～1931)は、カール・フレッシュの高弟で、抜群の才能を持ち、すでに教授の称号を得てベルリン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターにも就いて将来を嘱望されていたヴァイオリニストであった。名ヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラー(1875～1962)からも目をかけられていたほどであったが、現在ではほとんどその名は知られていない。絶頂期の1920年代末の録音が遺ってお

り、その復刻盤 CD での凛としたたずまいの演奏を耳にするに付け、貴志と同じく急死、早世が惜しまれる逸材である。

- 7) 恵まれた環境のもと本格的にヴァイオリンのレッスンを受け始めた康一少年は、1923年11月にハイフェッツ初来日の演奏会を父と一緒に大阪と神戸で、それぞれ二回づつ聴いている。それだけに一層、ヨーロッパ留学時にも彼の輝かしい演奏を聴き、その活躍ぶりを目の当たりにした貴志は、憧憬と同時に世界を舞台にヴァイオリン界で名声を博すことの難しさを身に沁みて感じたことであろう。
- 8) ドイツの婦人雑誌“Die Dame”Heft 2 (1931年10月号)に、貴志は「私の家族」(“Meine Familie”)と題したドイツ語での随想を、両親・姉妹・弟の写真入りで寄稿している。旧制甲南高校時代からすでにドイツ語を学び、第一次ベルリン滞在中には音楽を学ぶかたわら、演劇学校にも通いドイツ語や演劇史を学んでいた彼は、遠く離れた故国の家族への思い、華道、宗教、桃と端午の節句、七夕やお盆の行事などを素直なドイツ語の文章で綴っている。その随想冒頭の一節を原文で示しておく。

„Ich bin Japaner und studiere in Berlin. Dieses Leben in dieser schönen, großen und lebenswürdigen Stadt macht mir viel Freude, welche nur dadurch ein wenig getrübt wird, daß ich von meiner Familie getrennt bin und daß die große Entfernung ein öfteres Wiedersehen nicht möglich ist. Denn erstens ist es kein Vergnügen, in 14 tägiger Reise durch Sibilien zu rollen, und zweitens ist das auch immer eine etwas teure Angelegenheit. Aber eine lebhaft — hauptsächlich von seiten der Familie — und erfreuliche Korrespondenz und der stetige Austausch von Fotos ist mir ein kleiner Trost.“

- 9) 1933年には、貴志はドイツを代表する映画会社ウーファの文化短編映画『鏡』(“Der Spiegel”)と『春』(“Der Frühling”)を監督し、前者には自ら出演するとともに両作品の付随音楽も作曲している。さらに翌34年3月29日にはウーファ交響楽団を指揮、ソプラノ歌手マリア・バスカを迎えて自作の管弦楽組曲『日本組曲』とオーケストラ伴奏の歌曲8曲をプログラムに組んだ「日本の夕べ」(“Japanischer Abend”)を開催し、ベルリンの聴衆から熱烈な喝采を浴びている。その様子をベルリンで発行されている新聞各紙が活き活きと伝えている。25歳の誕生日を直前に控えた彼の喜びを伝える、故国の家族に宛てた書簡も遺されている

- 10) この演奏会は、独日協会の後援で1934年11月18日（日）に開催された。プログラムは以下の通りである。前半は、1. グルック：『アルチェステ』序曲 2. 貴志康一：交響曲『仏陀』 3. 貴志康一：オーケストラ伴奏付歌曲6曲（ソプラノ：M. バスカ）。休憩を挟んで後半は、1. クロード・ドビュッシー：『牧神の午後への前奏曲』 2. 貴志康一：大オーケストラのための『日本のスケッチ』 3. リヒャルト・シュトラウス：交響詩『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』。ベルリン・フィルを相手に、自作を中心に据え、彼の作風にも影響を与えているドビュッシーの出世作、そして最後には名実共に当時ドイツ音楽界の最高権威であった、R. シュトラウスの演奏至難の交響詩をプログラムに組んだ、若き貴志康一の覇気と心意気が遺憾なく伝わってくる演奏会である。とりわけ後者は、シュトラウスが職人的な作曲技法を駆使し、作曲当時の頑迷固陋な批評家達を皮肉ったところもある曲であり、それをプログラムの最後に据えたのは、独立不羈の快男児貴志の面目躍如たる所である。ベルリンの新聞各紙の批評も、概ね好意的である。それにしても、25歳の彼のベルリン・フィル登場は日本人としては近衛秀麿に次いで二人目であるが、その時までにはさほど指揮の経験があったとは言えないだけに、まさに画期的な出来事である。この初登場が翌年の帰国直前のレコード録音に繋がったことは、想像に難くない。
- 11) 妙心寺は、その広大な山内に46もの塔頭寺院が点在する、2009年に開山無相大師示寂650年大法会の年を迎えた京都花園にある古刹である。ちなみに、貴志康一の戒名は黄鐘院安康道一居士。その院号は、妙心寺法堂内に収蔵されている698年作のわが国最古の在銘鐘で、形・音色共に優れている「黄鐘調（おうじきちょう）の鐘」緑のもので、いかにも浄土の彼に相応しい。吉田兼好も『徒然草』第二百二十段で、黄鐘調の鐘の音色の素晴らしさを「凡そ鐘の声は黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舎の無常院の声なり」と讃えている。
- 12) この引用は、帰国直後貴志が月刊誌「會館藝術」1935年6月号に「歐州航路三題」のタイトルで発表した随想の一部である。日本でその後の貴志が歩む道筋が暗示されているかのようなこの随想を読むに付け、未完に終わった大器の早世が惜しまれてならない。

参考文献

1. ジョフリー・スケルトン（山崎敏光訳）『パイロイト音楽祭の100年』音楽之友社 1976年。
2. 日下徳一『貴志康一 よみがえる夭折の天才』音楽之友社 2001年。
3. 喜多ちえ『貴志康一の生涯』都島区役所 2002年。
4. 毛利真人『貴志康一 永遠の青年音楽家』国書刊行会 2006年。
5. 村岡輝雄『青少年のための音楽伝記 貴志康一』貴志康一生誕100年記念CD KSHKO-3 2009年。
6. 村岡輝雄『貴志康一の先輩にして未完の巨匠 Josef Wolfsthal』貴志康一生誕100年記念CD KSHKO-4 2009年。
7. Koichi Kishi in Berlin. Prospekt der Ausstellung im Japanisch - Deutschen Zentrum in Berlin 2009.

